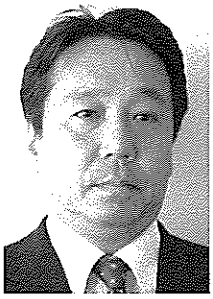

巻頭言

地面の下

（公財）日本植物調節剤研究協会　常務理事　横山昌雄

数年前から地元の防災訓練に参加している。昨年の晩秋には，近隣の三町会合同の訓練が行われた。町会ごとに避難集合場所にそれぞれ集まり，集団で指定されている避難所の学校まで避難路を歩いた。避難所では地域の消防署長の挨拶，東北の震災後に支援に行った中学校教師の講演などがあり，その後，消火，救助，人工呼吸，AED の使用などの訓練を消防署や消防団の協力により行い，古くなった備蓄食料をお土産に解散した。

消防署長は挨拶の中で，災害時には消防署員や消防団員の活動が十分行き届かないので，火の始末や初期消火には住民が協力して自ら行うことを求めた。しかし，訓練に参加した人たちは，地域住民の多くが高齢者で，実際に災害が起きたときには訓練のようにはいかないだろうという。また，町会内や避難所までの避難路には電信柱が立ち並んでおり，電信柱が倒れ，電線が垂れ下がったら，住民の協力はもとより避難場所に行くこともできない。少なくとも，電線くらい地下に敷設して欲しい。要望を出そうという声が上がった。ところが電線の地下敷設は難しいらしい。

古い住民によると，町会のある上野の山一帯はもともと徳川家の菩提寺の一つ寛永寺の所領で，幕末維新期の動乱で焼失した江戸時代の寛永寺やその子院群の遺構が地下にあり，現在の建屋や道路もその上にあるという。近年でも発掘調査が上野公園内や周辺地で断続的に続けられている。これまで，国立科学博物館構内からは寛永寺子院青龍院の遺構，弥生時代の竪穴住居跡，埴輪片が出土し，国立西洋美術館構内からは多数の古墳時代竪穴住居跡が確認されており，上野公園一帯は寛永寺の遺構だけでなく，縄文・弥生から古墳時代の遺跡も見つかるという。町内でも家を建て替えのため地下を掘ると大きな石がいくつも現れるという。町内の道路を掘り返すと遺跡が現れる可能性があり，その調査のために莫大な時間と費用がかかるので，電線を地下に埋めることができないらしい。厄介な所に住んでいる。

上野の山は，根岸や谷中，根津など江戸時代には田んぼや畑，小川が流れる田園に囲まれていた。

山の東側には江戸時代，寛永寺の門主，輪王寺宮の隠居所あり，坂道を下ったところが根岸で，今は JR 山手線の鶯谷と日暮里の間辺りである。山に沿うように音無川という王子を水源する川が流れていた。音無川は昭和初期に埋められ暗渠となり，現在，荒川区と台東区の境の道路として残っている。

西側の低地には不忍池に流れ込んでいた藍染川があり，夏目漱石の「三四郎」にも登場している。

「・・・この小川を沿うて，町を左へ切れるとすぐ野に出る。川はまっすぐに北へ通っている。三四郎は東京へ来てから何べんもこの小川の向こう側を歩いて，何べんこっち側を歩いたかよく覚えている。美禰子の立っている所は，この小川が，ちょうど谷中の町を横切って根津へ抜ける石橋のそばである。「もう一町ばかり歩けますか」と美禰子に聞いてみた。「歩きます」・・・しばらく川の縁を上ると，もう人は通らない。広い野である。」

藍染川も埋められ暗渠になり，現在ではくねくね曲がった生活として台東区と文京区の境として残っている。音無川も藍染川も地下では暗渠として，水害を地上は生活道路として残っている。

私たちが生活している場所の地下には歴史や自然が残っている。都市化した場所も農地も同じよう。私たちの生活は多くの人たちの営みの積み重ねによって構築されている場所を利用している。